

もう一つの沖縄・南大東島

—農的社会デザイン研究所代表・蔦谷栄—



蔦谷 栄一（つたや えいいち）

東北大学経済学部卒業。1971年農林中央金庫入行、熊本支店長、農業部副部長を経て、96年7月農林中金総合研究所基礎研究部長。常務取締役、特別理事などを経て、現在、農的社会デザイン研究所代表。

〔主な著書〕

「地域からの農業再興」「共生と提携のコミュニティ農業へ」（以上創森社）「日本農業のグランドデザイン」（農山漁村文化協会）「農的社会をひらく」（創森社）など

はじめて南大東島に足を運んだ。長野県伊那市にある直売所・グリーンファームに「パイアの会」があり、南大東島の生産者と2005年から定期交流を続けている。南大東島に出かけるきっかけもなかなかないことから、パイアの会の南大東島訪問に飛び入りさせてもらったものだ。

太平洋に浮かび、那覇からほぼ東に360キロメートル。小型飛行機に乗ってちょうど1時間。南北6キロメートル、東西4キロメートルほどの島で、高いところで70メートル。人口は1306人（19年1月推計）。島の面積の6割を農地が占め、メインの作物はサトウキビで、サトウキビの連作障害を防ぐためにカボチャとの輪作が多く、パイアやバナナ、パイナップル等の果実も生産されている。

南大東島はサンゴ礁が隆起するとともに、沖縄本島とは異なってフィリピン・プレートの上であり、東洋一とも言われる鍾乳洞・星野洞がある。また年間7センチずつ島が移動しているとかで、その痕跡を示すとされる崖の深い切れ目が続くバリバリ岩等、地質学的にも見どころは多い。また絶好の釣り場でもあり、豊富に獲れるサワラやマグロを漬けての「大東寿司」も絶品だ。

ここで特に触れておきたいのが南大東島の歴史である。大東島という名前自体が、琉球王朝の人々が「うふ（はるか）あがり（東）」にある島と呼んだことに由来しており、その存在は昔から知られながらも無人島のままで、開拓に着手されたのが1900年と歴史は新しい。「鳥島の開拓でアホウドリの羽毛採集事業を起こし、巨万の富を築いた玉置（八右衛門）は後継事業として大東島の開拓に乗り出した」もので、八丈島出身者を中心とする22人の技術力にも富んだ選抜隊を送り込んで開拓を開始している。ここでは歓迎の言葉が「メンソール」ではなく「おじゃりやれ」に象徴されるように、八丈島と沖縄がミックスした独特の文化が形成されてきた。



大型機械によってサトウキビは収穫される

一方、島全部を製糖会社が所有してきたものを、沖縄返還の前、64年に米国政府によって農民は無償で土地所有権が認められたという経過を持つ。現在、農家1戸当たりの農地面積は約8ヘクタールと日本平均の3倍以上。区画も大きく、それだけに大農機具の導入は一般的で、作物は異なるものの、その田園風景は一見すると北海道と見まがうばかり。1人当たり県民所得は沖縄県内では北大東島に次いで南大東島は第2位。所得が高い一方で、特定の農作物や魚介類を除けばほとんどを島外に依存しているため、運賃コストがかさんで物品は高い。とはいえ買い物をする場所もそんなにないため、ぜいたくをしなければ暮らしていくには十分だ、と島民のHさんは語る。

暮らしやすいせいか若い人や子どもも多く、小学生は125人と島民の約1割を占め、出生率も2.07人と高い。そして小学生を中心とする子どもたち30人ほどは伝統芸能である八丈太鼓に取り組む。平日夜6時半から7時までの30分間、毎日、先輩の指導を受けるが、すべてボランティアで運営。演奏自体は八丈島と同じだが、南大東島の演奏だと聞き分けられる“なまり”のようなものがあるという。沖縄の島々とは異なる歴史・文化・食と農を持つ魅力あふれる島だ。